

[色彩豊かな森林空間づくり (シカ被害による裸山復旧技術の開発)]

### 2004年から2007年にかけてのシカ生息密度分布の変化

新井一司

(都市環境科)

**【要約】**糞粒法を用い、2004年から2007年にかけてシカ生息密度分布の変化を明らかにした。奥多摩町の多摩川北岸で埼玉県や山梨県との都県境付近などは、依然として高密度であった。一方、多摩川と日原川との分岐付近では、生息密度ゼロの地域がみられた。

#### 【目的】

奥多摩町やその周辺の地域では、ニホンジカ（以下、シカと略す）による森林被害が生じており、2004年には、裸地化が進行し、大量の土砂が流出するという甚大な被害地がみられた。都は、2005年に東京都シカ保護管理計画を策定し、今後、生息数を管理しつつ、シカとの共存を目指すとしている。この共存を達成するには、シカがどの地域に高密度に分布するのか、分布域は拡大しているのか、といった実態を把握しておくことは、極めて重要である。そこで、糞粒法を用いてシカ生息密度分布図を作成し、3年間の変化を明らかにした。

#### 【方法】

対象地域は、東京都西部の奥多摩町と檜原村の全域、青梅市西部、あきる野市と日の出町の一部である。現地調査は、森林課、森林事務所などの協力により上層がうっ閉したスギ・ヒノキ人工林などの樹林内環境において34カ所、伐採跡地や再造林地のような上層木がほとんどない明るい林地の林外環境において22カ所、合計56カ所について2007年10月から11月にかけて行った。1カ所の調査は、約1ha内を5m間隔で1m<sup>2</sup>内の糞粒数を数え、これを240地点行い、平均糞密度とした。得られた糞密度から東京版シカ個体密度計算プログラム(ver. 0411)を用いて生息頭数を算出し、1キロメッシュ区分の分布図を作成し、2004年、2005年、2006年の分布図と比較した。

#### 【成果の概要】

- 1) 図1に示したように2007年に奥多摩町の多摩川北岸で、埼玉県や山梨県との都県境付近などでは、10頭/km<sup>2</sup>以上という高密度のメッシュが多くみられた。この高密度な地域では、毎年、多数のシカが捕獲されているが、依然としてその密度は低下していない。一方、奥多摩町の多摩川と日原川との分岐付近では、低密度に推移しており、生息密度ゼロの地域もみられた。
- 2) 2007年に檜原村では、低密度ながら分布域の拡大がみられ、今後の動向を注意深くみていく必要がある。
- 3) 以上の結果から、奥多摩町で低密度となった地域では、捕獲の効果が現れたものと考えられる。一方、捕獲しても依然として高密度の地域が存在する。今後、この高密度の原因について究明していく。

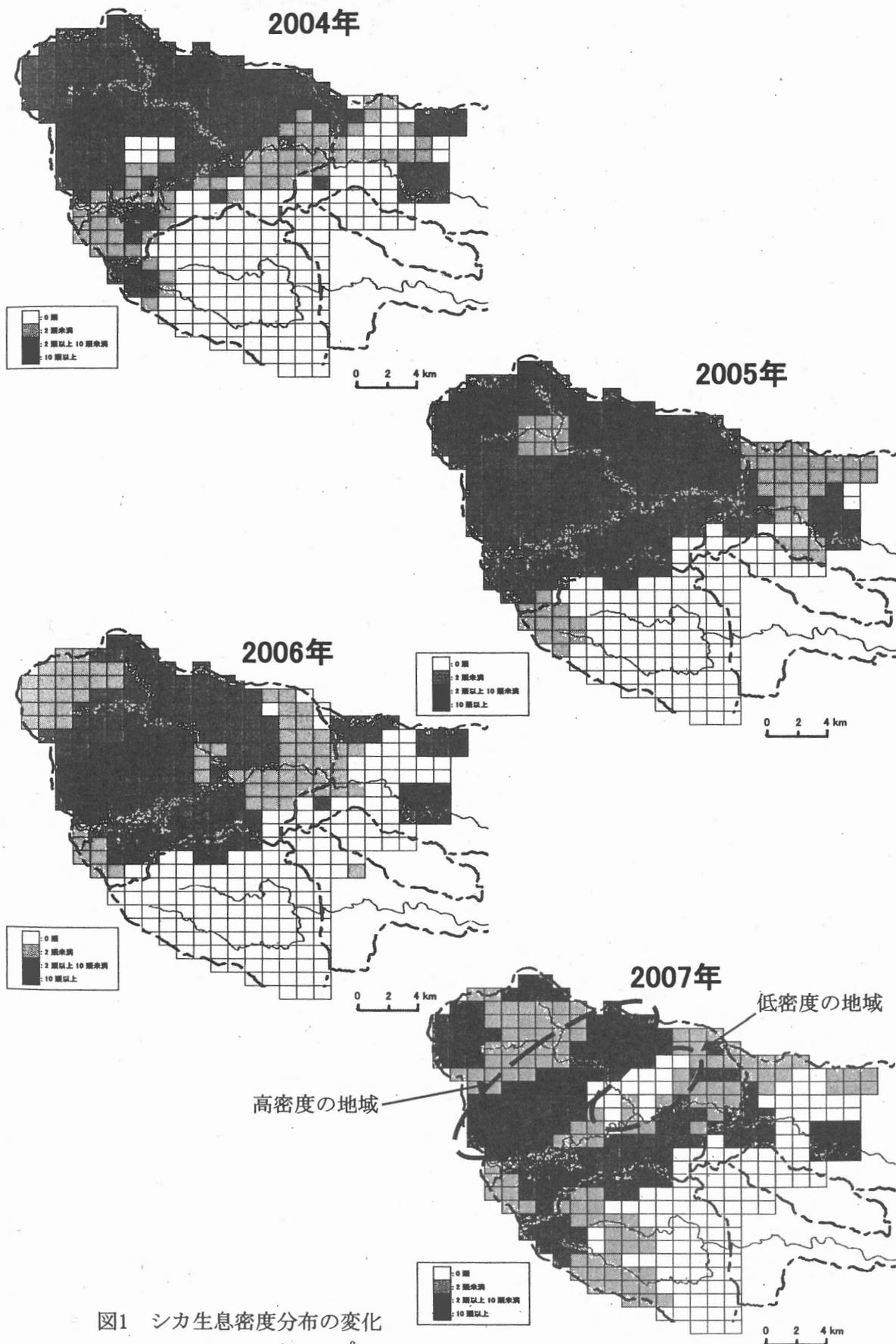


図1 シカ生息密度分布の変化  
1メッシュの面積は、1km<sup>2</sup>である。